



初めての海外生活 ド市民と交流

8月2日～13日にかけて、市内から7人の学生が学生訪問団として海外友好都市であるドイツ・ドナウエッシンゲン市（以下、ド市）を訪問し、現地の文化や生活習慣を体験しました。これは、国際交流推進事業の一環で、若い世代の国際感覚を育てることが目的です。学生たちは、ホームステイを通して異国の暮らし・文化を体験し、街並みからは、歴史とド市民のまちに対する想いを学びました。そして、ド市の子どもたちに習字や折

り紙といった日本文化を伝え、交流を図りました。

より深い交流を目指して 言葉の力の大切さを知る

学生たちがこの訪問団に参加した目的は、語学や文化を学びたい、生活を体験したいなど様々です。それぞれが学びたい、知りたいと、現地で積極的に取り組む中で立ち上がったのは「言葉の壁」でした。

食生活に興味があり参加した土屋さんは「質問をしたくても、言葉がわからず何度も悔しい思いをした」と振り返ります。日本語が通じない海外で、コミュニケーション

を図る手段の一つとして英語があります。学生たちは、少しでも多く会話をしたいと、学校で学んだ英語を頭の中から引き出します。うまく話せないことにもどかしさを感じながら、「語学力があればもっと楽しめたのに」と英語を学ぶことの大切さを、身に染みて感じていました。

言葉の壁にぶつかって 見えた、想いの強さ

ド市の生活で初めて「言葉の壁」を感じた学生。しかし、「楽しかった」と笑顔で今回の訪問を振り返ります。それは、なぜでしょうか。そこに

想いを伝える。 は受け継がれる。

上山市学生訪問団、海外友好都市ドナウエッシンゲン市へ

上山市から約9,000km離れているドナウエッシンゲン市でホームステイを通して、国際感覚を育む「交流学生派遣事業」が12日間にわたり行われ、市内の高校生と大学生7人が派遣されました



は、異国の文化に触れ、ド市民との交流を通して、言葉よりも「想い」を伝えることの大切さを知ったからです。

ド市の幼稚園で、子どもたちとの触れ合いから橋本さんは「言葉の壁を超えて、習字や折り紙など、日本文化を教えることができた」と、コミュニケーションを図るために言葉は絶対条件ではないことを知り、椎谷さんは「相手に伝えたいという『想い』と、伝えようとする『努力』があれば、国が違っても分かり合えます」と直に肌で感じ、自分の『想い』を相手に伝えることの大切さを、強く訴えます。



8月5日にド市の市役所を訪問。たくさんの方が見守る中、フライ大市長からド市の風景などを写真で紹介したフォトブックが訪問団に渡された



8月6日には浴衣に着替え、ド市の子どもたちに上山を紹介。写真を使って文化や祭りを説明し、日本の魅力を伝えた